

## 江戸末期の「カタカナ売薬」に関する考察

野尻佳与子

奈良女子大学大学院 人間文化研究科

現在は、カタカナで名付けられた市販薬が大半を占めているが、18世紀までは漢字表記の売薬しか市販されていなかった。丸、丹、圓(円)、散、湯、煎、膏、焼、香、もしくは薬などが末尾につき、この前に漢字もしくは平仮名を組み合わせた名称が、漢方薬だけでなく売薬でも一般的であった。そうしたなかにカタカナの売薬が出現するのは、19世紀初めのことである。本報告は、オランダ語など洋風の響きがする造語を、カタカナで表記して名称とした「カタカナ売薬」についての考察である。

昨年、カタカナ売薬として、最もよく知られている「ウルユス」のことを、多くの類似品が出まわるほどの人気商品であったことを紹介した。そして、この度、存在は知られていたが実体が明らかでなかった「ホルトス」「テルメル」の当時の製品が見つかり、実物を並べて文化史の側面から分析したので、ウルユスとも比較しながら報告する。

【ウルユス】健寿堂：松尾丈右衛門 大阪淡路町 根元長崎（ヘーステルの処方）

小包15粒入（1匁）/中包32粒入（2匁）/大包65粒入（4匁） 用量＝1回2粒  
（確認品）小包3.3cm×5cm（3列5段＝15粒）1粒＝1×1.1cm＝1.1cm<sup>2</sup>

【ホルトス】観生堂：大橋喜兵衛 大阪長堀橋 根元長崎（ヘーステルの処方）

小包16粒入（1匁）/中包35粒入（2匁）/大包72粒入（4匁） 用量＝1回2粒  
（確認品）小包3cm×6cm（2列8段＝16粒）1粒＝1.5×0.7cm＝1.05cm<sup>2</sup>

【テルメル】巖々堂：山本勘助 大阪心斎橋 本家淡州（阿蘭陀国亜羅遮伽之秘方）

小包5粒入（1匁）/中包10粒入（2匁）/大包22粒入（4匁） 用量＝1回1粒  
（確認品）大包7cm×5cm（3列4段＝12粒+10粒）1粒＝1.7cm×1.7cm＝2.89cm<sup>2</sup>

この他に、「底野迦（テリヤカ）」、「(蘭方) 墨埜設印（メデセイン）」、「(蘭方) キナキナ円」 「(蘭方) ホンボウル」 「フルム」 「テリヤアカ」 「ユルメル」 「ウルユス」 「ホンニス」 「コラクカ」 「ハッセイ丹」 などが、確認されている。

これまでの通説では、最初のカタカナ売薬はウルユスだと言われてきたが、今回の比較により、ウルユスとは断定しづらい結果となった。ウルユスに関する言説は、各分野の大家からこれまでに述べられてきたが、特に影響を及ぼしたのは次の四つで、その嚆矢説は戦後に広まったものと考えられる。

- ①明治20年(1887)『工商技芸看板考』坪井正五郎(風俗学・信道の孫)……「横文字は呑みこみにくし能書に うまみを見せてウルユスの見世(『狂歌江戸名所図会』より)という狂歌を紹介しながら、本邦初の横文字看板は、文化9年創業のウルユスの看板だとしている。(最初のカタカナ売薬とは述べていない)
- ②大正6(1917)『医学に関する奇談異聞』田中香涯(医学)……ウルユスの発売時期を明和から天明期頃と記した。(この説は田中の勘違いによる誤記)
- ③昭和7年(1832)『大言海』[明治22年(1889)『言海』]大槻文彦(言語学・玄沢の孫)……ウルユスの語源は、「空」を三分解したものと語源辞典に記載した。(最初のカタカナ売薬とは述べていない)
- ④昭和24年(1949)『日本薬学史』清水藤太郎(薬史学)は……「洋名売薬の初め」として紹介されている。(これ以降、ウルユスの嚆矢説が通説となる)

つまり、①の「横文字看板の最初説」と、②の「明和天明発売説」が人々の話題に上るうちに合体して、④のように「カタカナ売薬の最初」とも言われ出したことが推測できる。そして語源の話は、③の発刊以降に、知識人の雑談として笑いを交えながら広まった。大槻自身は、これを知ったときには捧腹絶倒したという「空」の三分解だが、何を見て腹を抱えて大笑いしたのか、その情報源は不明である。

本研究は、武田科学振興財団2014年度杏雨書屋研究奨励『江戸時代の伝統売薬「ウルユス」「ホルトス」「フルム」についての比較研究』の一部である。